

自然体験は教育の原点、国の基

昨年11月、武蔵野市主催により「農山漁村の豊かな自然を活かす体験教育フォーラム」が開催された。本フォーラムは、東京2、沖縄1の小学校からのセカンドスクール事例発表とパネルディスカッションから成り立っていたが、会場は教育、農業、行政等関係者約360名の参加によって満席状態で、体験教育に対する関心の高さをあらためて実感させるものであった。

セカンドスクールとは、「武蔵野市立小学校5年生・中学校1年生が、普段の学校生活（ファーストスクール）ではしにくい体験学習を、授業の一部として自然豊かな農山漁村に長期滞在して行なうものです。各学校では、総合的な学習の時間を中心として、特別活動、社会や理科等の年間指導計画に位置づけして実施しています。」具体的には、例えば武蔵野市立第一小学校の場合、03年は、7泊8日で、長野県飯山市に長期滞在したが、この間、自然体験活動として裏山散策、昆虫や動物との出会い等による里山体験、お米の収穫、地引網等漁業体験による学習体験活動、郷土食体験やわら細工による生活体験活動、飯山の歴史巡りや和紙漉きによる地域文化との触れ合い等、長期滞在ならではの体験メニューが豊富に盛り込まれている。2、3泊での短期滞在型の林間学校とはしっかりと差別化されており、武蔵野市から都内や沖縄の小中学校へと広がりを見せている。

セカンドスクールを発案した現武蔵野市長は、パネルディスカッションの中で、「自分の子供が、アパートで、飛んだり跳ねたりできず、また自然と触れ合う日常的機会を持たない現実」に、これは「人間は自然の中に存在するという原点を、都市生活が失わせている」のではないかと直感したのが発端であり、「構想してから17、8年、市長になってから10年」かけて、やっとここまでたどり着くことができたと振り返っておられた。そしてこのような発想の背景には、「21世紀の最大のテーマは、都市と農山漁村との交流だと思っています。都市の繁栄はきわめて脆弱な基盤に立っています。食糧ひとつとっても生存に必要なものはすべて田舎から供給されている。巨大都市が発展しつづけていくためには、農山漁村の支えが必要不可欠です。ところが、都市と農村の断絶が生まれている。田舎はどんどん衰退しているのに、都市だけで繁栄できるような錯覚に人々は陥っています。…都市と田舎は対立するのではなく、交流し、共存することによって、逆に都市の閉塞状況を突破できると思うし、田舎は過疎を克服する活力が生み出せる」と別途記しておられる。

筆者もこうした発想、試みには大賛成である。教育に限らず、今の我が国が抱える諸問題は体験不足、自然に対する畏敬の念の喪失等共通の根を宿しているように受け止められる。子供教育、体験教育という観点に、親自身の体験、親子のきずな、さらには都市と農村との交流といった視点をも加え、セカンドスクール、週末農業、農村への定住等いろいろのかたちの交流を包み込んだ「第二、第三の田舎づくり」にまで積み上げていければとも思うのである。まさに、農村問題と都市問題は表裏一体的関係にあり、多様な都市と農村との交流によって形成される「田園都市国家・日本」が、これからの我が国のあり方を議論していくにあたっての重要なコンセプトになるものと考えられる。

（農林中金総合研究所 常務取締役 蔦谷栄一）